

萬葉武藏野紀行

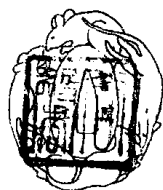
谷 馨 著

刀 江 書 院

著者略歴

昭和五年早稲田大学国文学科卒業・拓殖大学教授
図書館長を経て現在早稲田大学文学部専任講師・
拓殖大学兼任教授・歌誌「朝鳥」主宰・主著に「山
上憶良」「短歌の精神」「和歌文学論攷」「短歌の
表現と文法」「現代短歌精講」「歌集年輪」「歌
集妙高」「歌集青雲」「歌集正述心緒」がある。

萬葉武藏野紀行



¥ 350

昭和三十四年五月二十日

初版発行

著者 谷 馨

発行者 中村 正明

発行所 刀江書院

東京都千代田区西神田二
電話九段(33)四五〇九

落丁乱丁はおとりかえいたします

目

次

小崎沼・埼玉津の遺跡と歌碑……………	三
曝井と防人の妻の歌碑をめぐりて……………	二七
秩父吉田の歌碑……………	五三
武州御嶽の鹿ト……………	六九
多摩河畔の万葉歌碑……………	八七
多摩の横山を行きつつ……………	一〇七
入間路の於保屋が原紀行……………	一三三

小 岫 をぐき が 雉 きざし	一五一
おもしろき野をばな焼きそ	一六一
武藏野古寺	一八五
うけらが花	一九九
「むらさき」など	二二三
卷 末 記	二三一

萬葉武藏野紀行

小^を埼^{さき}沼^の・埼^{さき}玉^{たま}津^のの
遺跡と歌碑



武蔵野を歩いて、万葉の遺跡に立つて時を過ごすのを、私はこの頃の楽しみにしている。なつかしい万葉びとが、この川沿いの道を辿りこの原の草を藉しいて、黙もくしがたい生の詠歎を歌に洩したと思えば、山河のたたずまいは勿論、一塊ひとくれの土といえども声あるかに眺められる。文字にのみ読むのとは違った切実さを以って、歌が迫るのである。文学地理調査の魅力の大半は、そうした親近感を増すことにあるのだが、そればかりではなく、時の推移が、遺跡の上にも容赦ないことを見聞きするにつけても、立ち去り難い感傷をさえ覚えるのである。歌碑のような恒久性を持つものにも、時はその力を揮う。多摩河畔（小田原編「箱」の北）の東歌の碑にしても、文化二年建立の楽翁筆の原碑は、文政の洪水に流失、今あるのは、拓本を模刻して大正十一年に再建せられたものである。この間訪ねた秩父吉田の防人歌碑も、中央に致命的な亀裂が痛々しい。砂岩であるだけに、長くは保つまいと惜しまれた。あの樋口一葉の碑、浅草竜泉寺町の旧居跡の碑も再建である。原碑は戦火にそこなわれた。早稲田で教えを受けた故山口剛さんが、東京

下町に残る碑をたずねて、その湮滅せんことを憂え、数多くの拓本を取られたことが憶い出される。「断碑断章」に、思い深く綴られているが、この書も、近頃は入手が容易でなくなったようだ。

二

「新編武蔵風土記稿」に、宝暦三年崎玉村（北崎玉郡崎玉村字崎玉・今の行田市崎玉）に、忍城主阿部正因が万葉集所見の小崎沼・崎玉津の旧蹟を定めて歌碑を建てた、という記事がある。鳥瞰図も添えてあり、北に古墳や忍城が見えるのも面白い。宝暦三年の建立といえ、万葉歌碑の中で最も古いものである。行ってみたいと思いつつも、田舎のバスのことを考えると、つい臆却で、延びのびになって居たが、若い学友に促されて、去る七月の末、大宮から行田ゆきのバスに乗る。

註……「新編武蔵風土記稿」は文化七年から天保元年にわたって編纂せられているが、崎玉郡の稿は文政六年に成る。従って、建碑の宝暦三年は、その文政六年からでも七十年前になる。

バスは鴻の巣で右折し、中山道はずれて北上する。「崎玉すしや前」で下車。東へ数丁歩

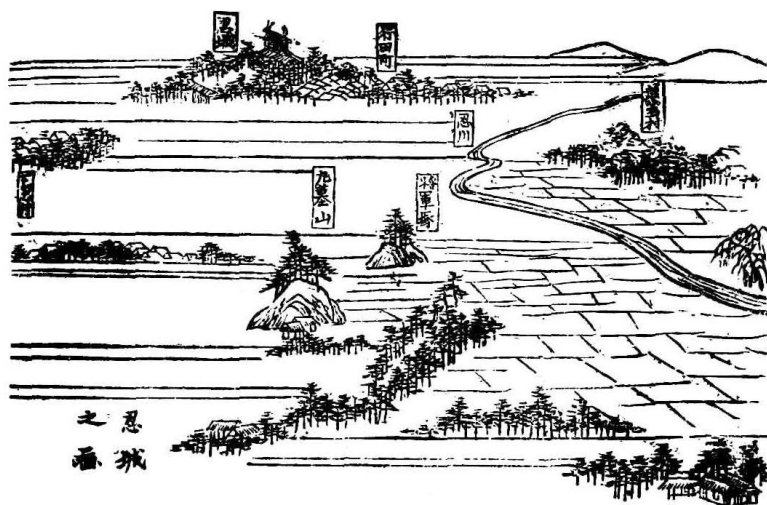
埼玉沼澤地邊之圖



—— 載 所 稿 記 土

いて、点在する農家ははずれると、一面の稲田である。はるかに忍川おしかはの低い堤が帯のようにめぐっている向うに、遠く村落が見えるまで、目を遮るものもなく展けた田圃は、往古漫々たる入江であったと聞くに相應しい地相だ。行きあった農夫の話によると、今でも二尺五寸も掘れば真菰があらわれるという。その広い稲田の中にこんもりと、ささやかな（五〇坪）森が見える。碑は、この茂みの中にあった。蕪が絡んだ二本の棕の古木を中心に竹や楓などが密生、折からの梅雨ぐもりに陰々として、湿気が肌にまつわりつく。二坪あまりの沼水は浅く、淀んで、辛うじて小埼沼の跡をとどめるか。「新編武蔵風土記稿」にも「長

小崎沼埼玉津の遺跡と歌碑



——「新編武蔵風

三間幅一間許の小池なり」とあるから、當時と変りがないわけである。碑が立つ以上は、宝暦の頃も同じだったろう。数次にわたる干拓工事もこの森をのこしたのである。苔むした蒼然たる碑面をなめくじが這っている。側面に

古所名称武蔵小崎沼即是也、所考証以万葉和歌集矣、自寛平五年癸丑歲至今為八百六十九年、蓋可知其古矣、此地紛紜蕪蔚中而為隱其所、夫豈可不惜邪、於是勒其地名於石以為不絕不朽云

宝暦三年癸酉歲九月望、武忍城主玉褐阿部正因建、文国平岩知雄書と彫ってある。「寛平五年云々」は、万葉集を「新撰万葉集」(舊集)と誤ったものであ

る。どうしてこのような粗忽をしたものか。

三

歌は、碑背に刻んである（拓本参照）。

見武蔵小埼沼鴨作歌

前玉之小埼乃沼爾鴨會翼霧已尾爾零

置流霜乎掃等爾有斯

武蔵国歌

佐吉多万能津爾乎流布禰乃可是乎伊

多美都奈波多由登毛許登奈多延會禰

右万葉和哥集之歌二首

流布していた「寛永版萬葉集」を思わせる書体で、しっかりしている。「右万葉和歌集」としたところから見ても、明らかに「寛永版」によって書いたと思われる。

仮名まじりに書下せば、一首目は

武蔵の小崎の沼の鴨を見て作る歌一首

埼玉さいたまの 小崎をさきの沼に 鴨はなぞ翼はねきる 己おのが尾をに 零より置ける霜しもを 掃はらふとにあらし（巻九

一七四四）

口訳……埼玉の小崎沼で鴨が羽ばたきをする。自分の尾にふり置いている霜を払うというのであるう。

で、旋頭歌。「高橋連蟲麻呂歌集」の中に出る。蟲麻呂の作としてよい。

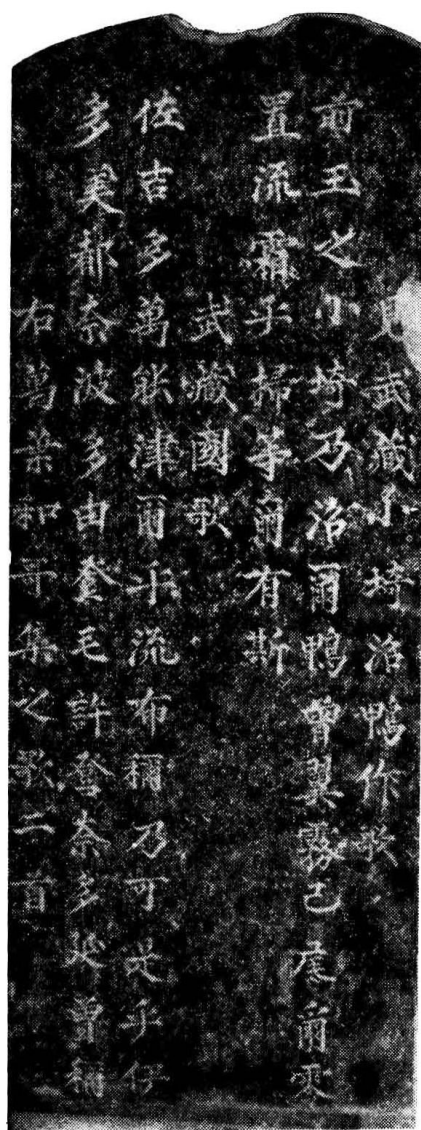
太古の東京灣は、陸地に北方深く入り込んでいて、一は栗橋・宝珠花附近から埼玉郡の一部に及び、一は大宮・川越あたりを浸（註一）していたというし、又後世までこの辺りは、東京灣に注いでいた頃（註二）の利根川と荒川が乱流していて、少なからぬ入江を作っていたのであるから、この

「小崎の沼」も、その名残りの沼と見ることが出来る。戸田茂睡の「紫の一本」は、足立郡見沼池に擬し、「武蔵名所考」は南埼玉岩槻城下尾ヶ崎村とし、「新編武蔵風土記稿」も亦「今按に郡中羽生町場の隣村に尾崎村あり、其辺多くは沼田なれば是小崎沼の旧蹟なるべく思はる、これしかしながら前にも云ごとくなればその実は知るべからず、」と言ひ、羽生の尾崎の沼沢ならむかと推定しているなど、説が分れるが、今となっては判ずるに由なく、確実な否定資料のない限りは、歌碑の所在地を尊重したいと思う。「倭名類聚鈔」に「埼玉郡埼玉郷さいたま（註三）」とある、

その古名を残す点も、「埼玉の津」との関係から軽んじ難いのである。

「埼玉県史」第二巻の「奈良時代交通路推定図」を見ると、国造時代の主要路が、^(註四)この辺りで交叉している。又、水路の利用は後世に及んで居り、「大日本地名辞書」にしばしば引用せられてゐる天正の「松平家忠日記」に、^(註五)古えの埼玉の津に近い忍の新郷を出、矢作・金江津に泊り、四日目に上代(香取郡小見川)に着いたとあるのも、参考になるのである。

註一……「埼玉県史」第二巻などによる。



註二……詳しくは「利根川沿革考」参照。「大日本地名辞書」に

惟ふに古の利根川は、西より来りて埼玉郡の北辺を流るゝや、新郷、川俣の間に会野川の一支出を南に分ち、幹河は猶東下し、村君岡の下を過ぎ、大越の辺より屈折して南に下り、間口、川口辺に於て会野川を復帰せしめたり。されば此一線は、当時の武蔵の州界にあたり、古簡に高野川と云ひ、其末には荒川入間川を合せて、隅田川と云へる者とす。而も寛永年中に至り、大越、佐波の間を塞きて、全川を下総国に注ぎ、渡良瀬川に合せしめたり。是より水勢に一大変を生じ、近世の形状となりぬ。

と説いているのは、簡明である。

註三……「倭名類聚鈔」は「佐伊太末」と訓んでいるが、勿論後世の音便である。

註四……松山から東北方へ向う道と大宮から鴻の巣を経て北上する道。

註五……「万葉集大成」二十一卷「風土編」所収の西角井正慶氏の文を参照。

然らば、官人の往来も稀でない要津だった筈である。養老の頃、常陸国守であり安房・上総下総三国の按察使（國司の治績や業績の）だった藤原宇合（不比等の子）の配下にいた蟲麻呂の足跡は、宇合管下の上総下総にも及んでいるが、勿論官用の旅で、この歌もそういう折の作と見るべきではあるまいか（次の「藤井一の歌の修下再説」）。彼は宇合に歌才を愛されていたと思われるから、彼を迎える郡司なども、歌人としての名を知っていたのではあるまいか。というのは、私はこの歌に多分